

今回、再度訪問して愛珠幼稚園を取材することにしたのは、園内にある茶室と女性の塑像がいつまでも心に残り、何か忘れた物をしたような気がし像が目に入った。何かを祈るように小さな苗を植えていた清水多喜



御堂筋の茶室

らかな心してくれる。「育てる」大切さと見守る「優しさ」を訴えているようにだった。

早速、園長の松村紀代子さんにうかがった。「わたし、この像が気に入っているんです」といって、歴史をひもといてくれた。昭和27(1952)

年9月のある日、第7代園長の中村道子先生が中之島公園を通ったとき、いろいろな塑像に出会ったが、中でもこの「植樹」の前でくぎづけになった。「愛珠幼稚園にぜひほしい」と思ったという。道子先生は、像の苗木のように、愛珠に集まる園児たちも大きく育ち、いろいろな友達と手を取り合って成長していったように、作者の清水多喜

示先生に手紙で訴えた。その思いが通じて「植樹」が譲られ、ここに居るという。これを知ったPTAが「植樹」に、詩人の竹中郁氏による4行詩「あたたかな／ひかりに

伝統、文化に触れて和む心

あてて／きよらかな／水をそそいで」を贈り、現在に至るまで園長をはじめ園職員の心の支えになっている。

塑像「植樹」にも一度頭を下げ、玄関を上がった。遊戯室を迂回して

折々には、ひな人形や五月人形も飾るといふ。この心遣いは商家の商人道園の教育は非常にアップにも通じ、保護者も跡取り教育に力が入ること

は、いうまでもない。船場の町人は家業の商売を

分も高めていったよう

ことであらう。

ある。

近代的商法に切り替わった今日でも、この北船場の真ん中で依然として伝統を大事にする幼児教育の存在は意義深いものを感じる。日ごろから大阪人について、近畿の他府県の人々に比べて伝統を大事にするところが薄いのではないかと、何となく感じる時がある。

伝統を重ねることで文化が育まれ、その文化に触

奥の和室に案内しつづつ、園長は静かに語り始めた。「この和室で卒園児の保護者がお茶遊びと称して簡単な作法を教えます。園児はお先にと礼をしてお菓子をいただいたき、感謝してお茶を飲むなどの作法を自然に身につけます。昔は食事の作法まであったのですよ」といふ。作法を見たり、体験したりして、感謝と思いやりが育まれ、その文化に触れて人は心が和み、感動し、あこがれて、そこに住みたいと思う。住めば郷土を愛し、街も活性化していくのではないだろうか。そう思うと、愛珠幼稚園の教育は非常にアップデートである。船場がまた求心力を持つ将来が果たしめである。大阪にもっと愛珠幼稚園のような精神が普及したら、やささか少年犯罪も減る

